

「由布院ものがたり」に学ぶ

「自然を活かす」ことと「もてなしの心」

「由布院ものがたり」(玉の湯・溝口薫平に聞く：中公文庫)を読む機会があり、直に溝口氏の講演を拝聴する機会を得た。街づくりへの地道な努力に深い感銘を覚え、観光立県・沖縄が学ぶべき大きな課題に目の覚める思いがした。

年間400万人が訪れると聞く大分県の温泉の街「由布院」。対照的に近接する「別府」の街がシャッター街と化していく姿を分かりやすく解説している。結論は、「自然を大切に作る心」と、人をして「丁重にもてなす心」の2点に尽きる。観光の街づくりに、示唆に富むものがたりである。

コンクリートで固めた広大な駐車場。大浴場、大宴会場を備えた豪華なホテル。そして華やかな娯楽施設と歓楽街。団体客を観光バスで送迎し、流れ作業でもてなす観光業。安かろう、悪かろう、儲かろうの世界である。

一方、古い街並みを大切に、自然を体感し、味わい、散策する街。まさしく自然の持つ「癒し」の力を存分に引き出すための諸々の工夫。そして、団体ではなく、「個」を大切にもてなす。価値を生み出す「質」を求める基本姿勢がある。

青春時代を名護の街で過ごした者には、かつてのあの名護湾の「なが・・・い」砂浜は、記憶の中から消えることはない。「21世紀の森」の理想像は、描き方によって大差が生じる。野球場、サッカー場。コンクリートのビル等々。他方、のどかに砂浜をジョギングする野球選手、健康管理に浜辺を散策する老若男女。静かな名護湾に浮かぶ遊覧船。名護城(ナングスク)からの眺望もまた、若者に水平線を超えて飛び立つ夢を抱かせた。

名護湾の埋め立てられてしまった海岸線は、結果としてシャッター街を創り出した。長期滞在型の観光の街にふさわしい光景が失われ、素通りしてしまう街に化してしまった。失われてしまった砂浜、自然は永遠に戻ることはなく、厳しい現実のみが残った。

10月31日の本紙の論壇。吉田朝啓先生の「龍潭池道りの並木に期待」の論説は、まさしく「由布院ものがたり」に語られた街づくりである。城下町・首里をどのようにイメージするかは大切なことである。いにしへの琉球の歴史を偲ぶ石畳の路地をコンクリートで固めてはならない。

街づくりには、耐えることも必要だと溝口氏は強調する。景観を重視し、建物の高さ、利便性を最優先させた広大な駐車場には規制と配慮が要る。50年後の街をイメージし、自然の醸し出す治癒力を最大限に活かし、ヒトを大切にもてなす心が、景気の波に左右されない観光の街づくりの礎となった。